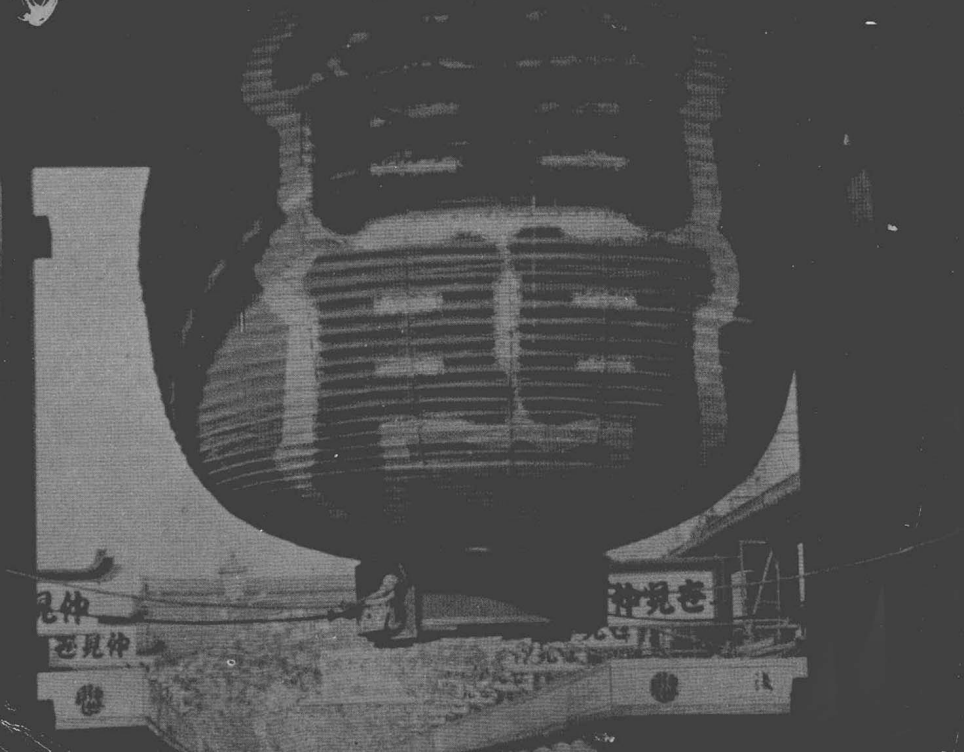
乾隆御筆

忘れもの

青春忘れもの＊池波正太郎



青春忘れもの
定価　四二〇円
昭和四十四年一月十日　印刷
昭和四十四年一月二十日　発行
著　者　池波正太郎
発行者　星野慶栄
発行所　毎日新聞社
東京都千代田区竹平町　郵便番号・一〇〇
大阪市北区堂島上　郵便番号・五三〇
北九州市小倉区紺屋町　郵便番号・八〇二
名古屋市中村区堀内町　郵便番号・四五〇
印刷　新灯印刷
製本　大口製本
〈検印省略〉
©一九六九　池波正太郎

青春忘れもの

■ 目次

祖父の家　七
蕪と株　三
再会　四
夢中の日々　六
十五代目・羽左衛門　八
別れ別れ　九
開戦前後　一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

応召前夜　一三〇
海軍八〇一空　一四七
終戦　一六三
恩師　一八一
旧友　二〇〇
〔あとがき〕ならびに小説について　二二二
同門の宴　二二五

青春忘れもの

装幀　玉井ヒロテル
表紙・小説題字　著者
扉・写真　東京浅草雷門

祖父の家

私の若いころのことを連載で書くようにと、編集部からのおはなしがあったとき、何度もためらった。五十には間もある年齢だし、若いときの〔恥〕をしるすにはまだ適当でない。また、いまの時点では思いきって書けぬこともあるし、この四十余年間の私の人生にあらわれては消えていった人びとは、みな、何らかのかたちで私の小説の中へ登場して来ている。それをいまさら〔実録〕で書くのも、どんなものか……？

しかし、達てというおはなしでもあるし、また一つには、このごろとみにおとろえた記憶力をふるいおこし、むかしの〔忘れもの〕を取りにもどることにも次第にこころひかれるおもいがしてきたので、おもいきってお引きうけしたわけである。

登場人物も実名、偽名とりまぜて書きのべてゆくつもりだ。

先ず生いたちから……。

などと、あらたまるわけではないけれども、私の青春も現在の私も、この生いたちによって強く影響されていることを今更ながら思い知ったからだ。読者諸賢の御退屈をあえて承知の上で……。

私の父・富治郎は、東京でも名の通った宮大工の棟梁の長男に生れ、姉二人、妹一人の〔きょうだい〕がある。私にとっては伯母二人、叔母一人というわけだが、上の伯母は私が物心つくころ、すでに吉原・仲之町の老妓であって、当時、武者絵で鳴らした日本画家・尾竹国観の〔二号さん〕であった。

この国観画伯の兄に尾竹竹坡という画家がいて、私が、おそらく五歳ごろであったろうか……吉原の伯母の家へあそびに行った折、二階座敷いちめんに数十枚の掛物用の画紙をならべ、波に初日の出の絵を大量生産している情景を、いまも、まぼろしのようにおもい出すことができる。

尾竹竹坡の〔波に初日の出〕は当時、なかなか評判のもので、おそらく正月用の依頼にこたえるため、竹坡おじは門弟数名を指図し、汗みずくになって筆をふるっていたものであろう。

新国劇の沢田正二郎が危篤前の小康を得た折、この竹坡おじが見舞におもむき二枚折の屏風に獅子舞をえがいたものを贈ったところ、沢田は大変によろこび、この絵屏風へ〔何処かで、囃子の声す耳の患〕の句を書きそえた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のちに、私が新国劇の座付作者と世間ではいわれるほどに、劇団と密接な仕事をするようになろうとは、竹坡おじも思ってもみなかったろう。

次の伯母は、仲之町の引手茶屋〔一文字屋〕を経営しており、ゆえに私は幼時、この二人の義姉のごきげんうかがいをする母に手を引かれて、吉原へは何度も足をふみ入れている。

こうした環境の上に、下の叔母は、歌舞伎座で小鼓を打っていた望月長太郎へ嫁入っており、したがって母は婚家先のつきあいに幼い私を連れて劇場へ足をはこぶことも少なくなかった。

助六・法界坊・道成寺などの舞台を五、六歳のころの記憶として、いまも私はぼんやりとおもいおこすことができる。

芝居と私とは、こうして切っても切れぬ間柄になってゆくわけだが……。

ところで、私の父はというと、これは少年時代から日本橋・小網町の綿糸問屋〔小出商店〕でつとめあげ、母と結婚をしたころは通い番頭の一人で、月給は六十五円であったという。

母の鈴は、浅草・馬道の錺職・今井教三の長女に生れ、同じ浅草・聖天町の父の家へ嫁入ったのだ。

「お前さんも変人だったが、お父さんも大変人だった」

のちに、よく母がいったものだが、何しろ、はじめての子である私が生れても、おどろきもし

なければよろこびもしない。

折からの大雪の日で、父も店を休んで在宅していたらしいのだが、二階で酒をのんでねむってしまい、いくら産婆が「男のお子さんが生れましたよ」と告げにいっても、ふとんの中へもぐったまま「寒いから、あとで見に行く」といい、ついにその日は階下の産室にあらわれなかったという人物。

とにかく大酒のみで、のちに四歳の私が台所から冷酒をもち出してのんでしまい、苦しみ出したところ、父は、私を抱いて雪の戸外へ飛び出し、

「こいつが、いちばんいいのだ」

私の体をつもった雪の上へごろごろころがして酔いをさまそうとしたという人物。

小さいころから綿糸問屋へ入って、とんとん拍子に番頭となり、月給のほかに、綿糸相場で稼ぐから金まわりはいいし、さらに池波家のたった一人の男の子というので親たちからなめまわすように可愛がられて育った父であるから、つとめ先の〔小出商店〕が当時で四十万円もの借金をこしらえて倒産したときには、手も足も地につかなかったろうと思う。

私の生れた年に、関東大震災がおこった。

それで、私は六歳の正月すぎまで、埼玉県の浦和で父母と共に暮したのである。

田園生活は父母もはじめてだったろうが、そのころの浦和の印象は、とても現代の浦和市からは想像もつかぬ田舎そのものであって、母が庭へトマトやナスのナエを植え、この朝露にしめった新鮮な野菜を母と共にもぎ取っている光景と、石置場で遊んでいるとき右の手を石にはさまれて大怪我をしたときのことを、いまもおぼえている。この手の傷あとは四十年を経たいまも歴然とのこっている。

この浦和で、父は失職をした。

一度も人生の壁へ突き当ったこともなく、したがって、その壁を打ち破ってすすんだ経験もない父は、たちまちに自暴自棄となってしまい、酒におぼれたようだ。

そこで、〔一文字屋〕の伯母の良人である伯父の小森一が、

「私が出資するから……」

といい、東京へ父母をもどして、下谷・上根岸へ家を借り、ここで父に撞球場を開業させたものである。

坂本二丁目から鶯谷を経て寛永寺坂へ向う大通りの北側に、いまも、この家が戦災にも焼けずに残っている。

したがって、私は根岸小学校へ入学したのだが、数カ月して、退学することになった。

父と母との間が、うまくゆかなくなったからだ。

父は、すでにのべたような性格だし、とてもとても客相手の商売が出来るわけがない。ビリヤードの経営は母とゲーム取りの〔おとりちゃん〕というのが二人で当り、父は、いつも酒をのんでは二階にねている始末。

いっぽう伯父（谷中に住んでいた）は出資者でもあるし、M物産から叩きあげて財をなした人だけに経営にはやかましい。

母もずいぶんと苦心をするのだが、父は知らん顔……というよりも、父には父で、むかしの夢を追い、その夢をまたよびもどすことが出来ないかなしみと自分の弱さを一層、酒へひたりこませるというわけだったのであろう。

ぶらぶらしている父が私を抱いて、母の実家を訪問しての帰途、稲荷町の通りで都電（当時は市電）にはね飛ばされたことがある。父も軽傷ですんだが、私は電車の前についている網の上へぽんと落ち、

「バンザイ、バンザイ」

と、両手をあげてはしゃいでいたそうだ。

そのうちに、ついに破局となる。

まあ、そのころの女房というのは芝浜の革財布ではないけれども、ぐうたらな亭主をもったなら、何とかこれをはげまして更生させようとするのが本当なのだろうが、気もつよく、東京育ちの母は、そこまではやらない。

上方の女とちがい、どうも東京の女は男に冷たいといわれるのは、こういうところなのだろうが、苦労がいやなのではなく、つまり男に愛想をつかしてしまうんですな。

谷中の伯父なぞは、

「いや何だよ、お前のおっ母さんが家を出て行ったのは当然だよ」

などというし、父の姉である伯母ですら、

「ほんとだよ」

と、うなずく。

よほど私の父は、みんなから見放された人物だったらしい。

「とにかく、酒をのんでふとんへもぐってしまうとね、三日も四日も起きない。いつ便所へ行くんだろうかと思うんだがね。それでいて、いつの間にか「おはち」の中の飯が減っているところを見ると、夜中に食うんだろうが……いやはや、まくらもとで私が、いくら起きろと怒鳴っても起きるどころか……」

谷中の伯父が、いまも可笑しげによくいうのだ。
この父の〔なまけもの〕の血と、母の〔はたらきもの〕の血の両方を私は受けついでいる。
こういう父であったが、私にとっては父は別に悪い父ではない。
よく可愛がってくれたし、撲りつけられた記憶もないのだが、自暴自棄となった父が母を撲ったり蹴ったりする光景を数度、私はおぼえている。
こう書くと、一方的に父が悪いようだが、なあに母だって口では負けていないのだ。
とにかく、夫婦別れ。
あわれなのは子供の私というわけだが、その実、ちっともあわれではなかった。

○

私は母と共に、母の実家で暮すようになった。
やがて、母は再婚して王子のほうへ行ってしまったが、少しもさびしくはない。
母方の祖父・今井教三は、初孫の私と暮すことをよろこんだ。
馬道の家が震災で焼失してから、母の実家は浅草・永住町（現元浅草二丁目）へ移転している。
震災にこりたというので、そのころ流行した軽トタンぶきの屋根の家で、下が土間に三畳、六畳、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com